慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	E.トーピッチのイデオロギー批判に関する一考察
Sub Title	Uber die Ideologiekritik Ernst Topitschs
Author	沢谷, 豊(Sawaya, Yutaka)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1984
Jtitle	哲學 No.78 (1984. 4) ,p.199- 221
JaLC DOI	
Abstract	In Japan ist das Werk Ernst Topitschs noch nicht geniigend bekannt. Es ware unmoglich, sein motivenreiches Gesamtwerk in Rahmen eines Aufsatzes zu wiirdigen. Denn ist es Ziel vorliegenden Beitrags, den Standpunkt seiner friiheren Werke zu klaren und damit den AnstoB daftir zu geben, daB die Rezeption und Kritik seiner Studien nun in Gang kommt. Zuerst ist seine Theorie fiber die Verhaltnis von Erkenntnis und Gesellschaft skizziert werden (1). Hier zeigt es sich, daB er auf dem positivistischen Standpunkt steht, daB er die Wissenssoziologie als eine Idolenkritik im Sinne Bacons betrachtet. Dann wird sein moralisches Denken zur Diskussion gestellt. Durch die Entscheidung will Topitsch die sittliche Handlung gegen den Nihilismus verteidigen (2). Als ein Beispiel seiner Ideologiekritik wollen wir Bann an das Problem des Naturrechts riihren (3). SchlieBlich werden meine Vermutungen iiber seine spateren Kritik gegeben.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000078-0199

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

E. トーピッチのイデオロギー批判に関する一考察

沢　谷　　豊*

Über die Ideologiekritik Ernst Topitschs

Yutaka Sawaya

In Japan ist das Werk Ernst Topitschs noch nicht genügend bekannt. Es wäre unmöglich, sein motivenreiches Gesamtwerk in Rahmen eines Aufsatzes zu würdigen. Denn ist es Ziel vorliegenden Beitrags, den Standpunkt seiner früheren Werke zu klären und damit den Anstoß dafür zu geben, daß die Rezeption und Kritik seiner Studien nun in Gang kommt.

Zuerst ist seine Theorie über die Verhältnis von Erkenntnis und Gesellschaft skizziert werden (1). Hier zeigt es sich, daß er auf dem positivistischen Standpunkt steht, daß er die Wissenssoziologie als eine Idolenkritik im Sinne Bacons betrachtet. Dann wird sein moralisches Denken zur Diskussion gestellt. Durch die Entscheidung will Topitsch die sittliche Handlung gegen den Nihilismus verteidigen (2). Als ein Beispiel seiner Ideologiekritik wollen wir dann an das Problem des Naturrechts rühren (3). Schließlich werden meine Vermutungen über seine späteren Kritik gegeben.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（社会学専攻）

エルンスト・トーピッチについては，日本ではまだ紹介の域を出ていないのが現状である．本稿は，このような状況において，主に彼の著『形而上学の起源とその終焉——世界観批判研究[1]』以前の研究を扱い，その思想形成期に彼がどのような立場からイデオロギーの問題と取り組んでいたのかを明らかにし，彼の思想の理解に資することをねらいとするものである．

1

トーピッチはイデオロギー批判を「知識社会学のうち，人間の思想が社会的諸条件によって蒙る歪曲と改竄とを確認し排除することを課題とする部門である[2]」としている．まず彼がイデオロギー批判をその中に含めている知識社会学との連関で，トーピッチの考え方に目を向けてみよう．

彼が知識社会学を正面からとりあげた論文に『知識社会学の問題[3]』がある．トーピッチは，ドイツで一世代前——この論文からみて——隆盛をきわめた知識社会学が急激に衰退した原因として，社会状況の変化とならびこの研究領域に内在的な要因を指摘し，後者の問題を論じている．その問題とは認識と社会の関係に関するものである．すなわち，社会的諸条件によって左右されない客観的な知識が存在しうるかどうか，という問題であるが，彼は，『学問と社会[4]』以来この問題と取り組んでいる．客観的な知識が存在しないならば，ある思想をして，それが社会的諸条件によって歪曲改竄されたイデオロギーであるかどうかを判断する基準を欠くこととなり，ひいてはイデオロギー批判も不可能になると思われたのである[5]．知識の存在被拘束性を主張する知識社会学は，客観的知識の存在，とくに自己の命題の正しさをまず論証しなければならない．

トーピッチは知識社会学の起源を，近代自然科学の発生と関係の深い実証主義的な——彼は「科学主義的な」という形容をもはばからない——伝統と神学的・形而上学的伝統に結びつく歴史主義の二つに求めている．彼は前者の代表として，F．ベーコンとD．ヒューム[6]の名を挙げ，後者の伝

統の行くつく先としてマンハイムの名を挙げている.

彼はベーコンにおいて，知識社会学の問題を解決するための基本的立場が与えられたとして，それを次の三点にまとめている.[7)]

1. 客観的な，その正しさが一切の心理的・社会的な過程・関係に左右されない知識が存在する.
2. 上の過程や関係は，客観的知識の発生や普及に対して促進的にも抑制的にも作用しうる.
3. 科学的に決定できる問題の領域外に，最終的には信念や生活上の実践的要求といった理論外的要因にもとづく社会的・文化的な生活領域が存在する.

ところが，このような伝統をもつ実証主義は，普遍的な科学的認識の可能性を承認するが，知識の基礎づけの客観的連関から心理的・社会的要素を切り離し，これらの要素を発生の問題にしてしまう傾向があり，それを研究しようとはしない．それゆえここには客観的な知識は存在するが，知識の社会学は存在しない.[8)]

これに対し歴史主義的伝統に立つと，知識は価値と共に社会的・心理的諸関係によって規定されることになり，客観的知識の存在は認められなくなる．その一帰結として，トーピッチはマンハイムの全体的イデオロギーをあげている．そして，それは自己の主張の正しさを主張できないとし拒否される.[9)] 歴史主義的な立場からは，思想の社会的研究はなされても知識の社会学が存在しないのである.[10)]

このような実証主義と歴史主義との中間の立場から知識社会学の「死点」を克服しようとするマルクスの試みも，トーピッチは不十分であるとしている.[11)]

トーピッチのこの問題に対する答は，実証主義的立場に立ち，知識の心理的・社会的発生を研究するということにあるが，そのためには歴史主義的な知識の相対主義を反駁しなければならなくなる．彼はこのような知識

の相対主義は，他の諸科学において別の名称で登場した問題の一変種であるとしている．その問題とは

1. 心理学主義
2. コンヴェンショナリズム
3. 擬人的モデルの使用

である．

第一の問題は，論理学における心理学主義であり，その中心的な問は，論理的推論の妥当性の問題を，思考する人間の現実の心理過程から抽象することは可能か，ということである．論理学では，記号論理学の精緻化により心理学主義——これは懐疑論的相対主義を意味する——は否定された[12]．その結果，論理的推論の妥当性の問題を，一切の心理的・社会的過程から切り離して考察することが可能となった．このような心理学主義の問題とパラレルな知識社会学上の問題は，個人や集団のもつ思想内容は，それをいだく個人や集団の実際上の過程から切り離して考察することができるか，ということになる．つまりその思想内容が妥当なものかどうかを，その思想を担う現実の人間の心理的・社会的過程から切り離して考察することができるかどうかという問題である．

論理学は心理学主義を克服したが，その結果生じたのは，ある公理系の内部では確かにある命題が正しいか否か，すなわちそこで仮定されている公理と操作規則に矛盾するか否かは確定しうるが，異なる公理系の間では，これを純論理的・数学的見地からは決定できないという結論，つまりコンヴェンショナリズムである．

自然科学においては，自然現象をさまざまな公理系を用いて説明できることは明らかである．そのためには現象との対応関係さえ存在すればよいのである．しかしながら，複数の公理系のなかから，やがて，「単純性」や「合目的性」，「有用性」[13]という観点からある公理系が社会的に選ばれることになり，極端なコンヴェンショナリズムは認められなくなる．

問題は自然科学よりも価値関係的な社会科学・歴史科学において一層その重要性を増す．この点に関する彼の論述は，この論文と52年の論文『社会科学におけるコンヴェンショナリズムと価値問題』[14]との間では，その重点のおき方がほとんど正反対になっている．『コンヴェンショナリズム』では，社会における不変なもの，一定の規則性，同形性といったものを強調することによって，価値関係的な諸科学においても客観的認識がありうるという立場に近づいている．ところが『知識社会学の問題』ではヴェーバーに依拠しつつ，はっきりとコンヴェンショナリズムを認める発言を行っているのである．

《……歴史科学的・社会科学的な基礎づけの連関の前提に，本質的にコンヴェンショナルな要素が入り込む，そしてその選択は社会的諸関係によって規定されうるものなのである．[15]》

このようにコンヴェンショナリズムを認めた後に彼が述べるのは，このような状況は社会科学の未発達もしくはその対象の特殊性によるものであろう，ということである．そして社会も自然と同様にカオスではないのであるから恣意的な仮説によっては整序できない，と指摘するにとどまっている．[16]

第三の擬人的モデルの使用は，上記の二つの問題とは性格を異にする．それは概念やカテゴリーの発生を擬人的思考モデルに還元し，概念やカテゴリーを分析・批判する方法に言及するものである．彼はF．エンゲルスが行ったダーウィンの生存競争説の批判を高く評価する．ダーウィンの説は，ホッブスの「万人の万人に対する闘争」，ブルジュア経済学の「競争」やマルサスの「人口論」を自然現象へと読み込んで，これを普遍法則とし，再び人間社会に適用して，人間社会の永遠の法則としたものである．また限定つきではあるが，E．デュルケームの概念の社会発生的説明を評価している．そして，知識社会学的観点を思想史の領域に適用することが実り多いものであることが証明されたとしている．この立場が彼の『形而

上学』の基礎にあることは，疑いえないであろう．トーピッチにとって知識社会学は，認識の改良，ベーコンの意味におけるイドラ批判であった.[17]

2

トーピッチの批判対象はきわめて多様である．『形而上学』以前では，自然法，現象学的価値論，評価的な国民経済学，歴史主義，コンヴェンショナリズム，マルクス主義の歴史哲学などがあげられる．これらの全成果が直接・間接的に『形而上学』へと結集しているのである．しかし『形而上学』における分析・批判の対象は，形而上学的な思考様式にひそむ神話的な残滓なのである．つまり彼は，現実の諸個人や諸集団の実質的な価値判断や要求などを批判の対象とはしていない．ところが70年代に入ると，批判対象はこの実質的な価値判断や目的，さらにはそれを主張する人の人間性までも批判対象としてゆき，その反面である自己の立場——啓蒙的保守主義を——合理化していく.[18] このトーピッチの立場の変化もしくは批判の重点の移行の原因としては，もちろん60年代の後半から生じた学生運動や当時の世界的状況といった外的要因があげられよう.[19] しかしそれと同時に彼自身の理論に内在的な要因をも考えられるのではないかと思われる.[20]

本稿は研究対象をトーピッチの初期の思想に限定しているので，必要がない限り，最近の彼の研究には言及しない．

『形而上学』の序で，「伝統的な形而上学の教義を無意味なもの，あるいは情緒的なものの擬似合理化であるとして黙殺し，その教義の構造や発展を研究しようとしない」[21] かつてのヴィーン学団に近いかその直接の影響下にある人々と一線を画し，トーピッチ自身は形而上学的思考の発生的・歴史的な分析批判を行うものである，と述べている．しかしながら，この形而上学ということばは，一般的な意味で用いられているのではない．彼はそれを Rickert と同様，現実よりはむしろ価値を対象とするものであるとしている．つまり形而上学という概念をトーピッチは価値哲学であると

理解している．このような彼の理解が正当であるか否かは別として，これは留意しておくべきことであろう．

『形而上学』で彼は，さまざまな方法で客観的——人間には左右されないという意味で——絶対的価値を基礎づけようとする伝統的な形而上学上の試みを，そこで用いられる概念やカテゴリーの発生にまでさかのぼって分析しようとする．その結果として彼が示そうとするのは，理論的に客観的絶対的価値を基礎づけることは不可能であるということと，形而上学上のさまざまなアポリアは，異なる由来をもつ神話的な思考モデルを批判的吟味なしに用いることによって生じたのだ，ということを歴史的に説明することである．

しかし，客観的絶対的価値の否定は価値ニヒリズムに陥いる可能性を秘めている．彼の課題のひとつに，倫理的行為の擁護があげられる．それゆえ彼はニヒリズムを批判しなければならない．この点は『形而上学』ではあまり前面に出てきていない．せいぜい最後の部分でいくらか言及されているにすぎない．しかしながら，トーピッチにとっては，意志の自由なくしては倫理的価値的行為はありえないものであることを考えるならば[22]，形而上学も，間接的にではあるが，この問題と取り組んでいたものと解釈できよう[23]．

倫理の問題こそ，Topitsch の戦後の思想の出発点であったと考えられる．トーピッチは1919年ヴィーンに生まれた[24]．この年は13世紀にまでさかのぼる歴史をもつハプスブルグ帝国が，サン・ジャルマン条約で公式に滅亡した年である．彼はこの地の国民学校，ギムナジウムに在学したが，当時のオーストリアはきわめて激しい政治的・経済的混乱期にあった．共和制は保守的なキリスト教社会党——これはのちに「僧侶ファシズム」とよばれるオーストリアのファシズムの母体である——とラディカルな社会民主党との対立の中で揺れ動いていた．双方が絶対的真理を旗印にしている限り，この対立は激烈なものにならざるをえなかった．37年，トーピッ

チはヴィーン大学に入り，哲学と文献学を研究することになったが，翌年，オーストリアはヒトラー治下の第三帝国の一州となった．その年の秋，彼はドイツ国防軍の徴兵に応じ第二次大戦を経験する．これらの体験から，彼は敵対する集団間に妥当する倫理原則の必要性を痛感したものと思われる．

平和な社会の実現こそが，彼の世界観分析・イデオロギー批判の最終的な目的である，と私は考えている．トーピッチは彼の戦後最初の論文といってもよい『学問と社会』で，相争う集団の対決は一切の社会秩序の基盤を破壊してしまうだろうとし，これを回避するため集団の壁を越えて妥当する普遍的倫理原則の必要性を示唆している．そしてこのような倫理的目的，つまり価値あるもの，当為の対象となるものは，彼にとって，意志の自由を前提としなければそもそも無意味なものであった．『形而上学』は，まさにこの意志の自由を救い出す試みでもある．

『学問と社会』ではキリスト教的な色彩を残しながらも，倫理的価値の基礎としては，マンハイム流の浮動的インテリゲンチャを想定していた．そこで彼は学者集団について次のように述べている．

《人が彼らを精神貴族とよぶとしても，その意味するところは……学者集団が，その成員に対し日々新たに実質的な業績をあげ，倫理的態度をとることを道徳上の義務として課している，ということなのである．事実，彼らの思想はイデオロギー的要素から自由ではない．しかしそれはさまざまな利害のどれかひとつと強固に結びついているわけではない．それゆえ彼らは，普遍的な倫理原則の大枠をつくることができる．相争う諸集団の対立は一切の社会秩序の基盤を破壊してしまうだろう．このような破壊を回避するためには，普遍的倫理原則がなければならない．[25]》

この引用部分は『学問と社会』のなかでもかなり違和感を感じさせる部分であるが，この後の論文では彼の立場は大きく変わる．知識社会学におけ

るマンハイムの立場については先に述べたとうりである．学者集団の精神貴族性に対する彼の意見の修正は『実存主義の社会学のために．宇宙―実存―社会』にはっきりと現われている．そしてこの連関で最も大きな変化は，価値は主観的なものになるということである．ただし，『学問と社会』の他の部分では，ヴィトゲンシュタインやヴェーバーについて言及がなされており，認識と価値をはっきり分けている．普遍的な倫理原則の要請と主観的決断とが奇妙な形で同居しており，キリスト教から実証主義への彼の立場の移行期に書かれた論文といえるのではないだろうか．[26)]

ここで指摘しておきたいことは，戦後の彼の研究が平和な社会の実現という理念をその背景としてもっていたということである．そのために倫理原則の必要性を感じていた彼をイデオロギー批判へと向かわせたのは，戦後の復古的情況，特に自然法の再興であった．

トーピッチは『学問と社会』の翌年，すでに『自然法の問題』[27)]と題する論文で自然法批判を開始する．そこでは，自然法的な価値の基礎づけは理論的に不可能であることが論じられている．しかしこのことはニヒリズムを意味してはならないものであった．彼がそこでヤスパースを引用し[28)]，価値評価を擁護していることや，同年発表された『マックス・ヴェーバーの歴史解釈』[29)]においても，ヴェーバーの価値自由はニヒリズムとは無関係であるという点を強調していることからも，ニヒリズムに一貫して反対していることがうかがえる．

この時期のトーピッチの価値に関する考え方は，きわめて主観的な色彩が強い．客観的価値の否定を主観的な価値判断，つまり決断によって相殺しようとしたと考えられる．

いずれにせよ主観的価値判断によって倫理的行為を擁護しようとする彼は，その前提となる意志の自由を擁護しなければならないと考えた．というのは，彼は『マックス・ヴェーバーの歴史解釈』で次のような問を発しているからである．

《デカルトが自然と精神を分離してしまった後の近代の全哲学者と同様に，ヴェーバーは研究者としてまたひとりの人間として次のような問に直面する．純粋に因果的に整序された，価値とも意味とも無関係な世界の動きの中で――ドイツ観念論でいう「必然性の王国」において――いったいどのようにして価値や意味をめざす行為，ことに倫理的行為は可能なのか．[30]》

この問は，彼自身に対する問でもあった筈である．というのは，トーピッチの研究の多くの部分がこの問題――自由意志の問題――に当てられているからである．「行為の責任性の本来の根拠としての，行為の絶対的自発性[21]」を意味する意志の自由を擁護しなければならないと彼は考えたのであろう．これに成功したと彼が考えたのは，おそらく52年の『歴史主義とその克服[32]』であろう．本稿では紙数の都合上この問題に言及することはできない．

決断を重視するトーピッチの考え方は，規範との関係においてもあらわれている．たとえば彼は実定法について，それが「自然法や道徳体系と同様に，単なる文化的事実，現実的体験，人間の行為様式もしくは価値中立的な意味の構成物にすぎない．そこから再び導き出すことができるのは，純事実的な帰結もしくは論理的な結論にすぎず，決して内的な『義務』などではない[33]」と述べている．そして規範，さらには社会の存続さえも決断によって大きく左右されるとしている[34]．

客観的認識と主観的価値判断もしくは決断という実証主義的な二元論が，初期の彼の思想の基礎にあった．

3

トーピッチは『形而上学』のはしがきで，それが自然法の問題に関する研究から生じたものであると述べている[35]．自然法に関する彼の最初の論文は，先に示した55年の『自然法の問題』である．この論文には，『形而上

学』よりもはっきりと時代性があらわれている．第三帝国を正当化するために用いられた自然法的思想が，今度は全体主義国家に対する強固な防波堤であると唱えられるようになってきたのである[36]．この当時を回想してトーピッチは知的に不誠実な状況であったとしている[37]．このような状況の中で，彼にヴィーン大学の哲学研究所の助手の職を周旋してくれたA．デンプフのキリスト教形而上学に不満をもつようになり，ヴェーバー研究を始めたものと思われる[38]．

自然法の発生を彼は次のように説明している[39]．つまり慣習や法が社会対立や反省によって自明なものでなくなると，規範の基礎づけの問題が生じてくる．複数の互いに矛盾する規範体系が人々に遵守を求めるようになると，人々はその中でどれが正しいかを判断する基準を求めることになる．これに対し様々な見解が科学的に示しうる「正しい」，「至高の」または「真なる」社会秩序・価値秩序であるとして登場するが，その際，自然ときには理性さえもが最終法延として用いられるのである．それゆえ，トーピッチによれば，自然法が問題となるのは社会の動揺の現われなのである．まさに二つの世界大戦とその後の混乱期に自然法が再び問題とされることになった．

彼は『自然法の問題』で自然法の歴史に言及しているが，それは理論的検討のための基礎としてであり，重点はあくまでも歴史ではなく理論的側面にある．彼は問題を二つに分けて検討する．つまり，アプリオリ・演繹的な方向と経験的・帰納的な方向である．

第一の方向で彼がまず彼が問題にするのは，明証性に訴える方法である．つまり，あらかじめ基礎となる価値を定め，これを公理として体系的に諸価値を展開していこうとする方法である．この方法に対するより詳細な反論は，彼の大学教授資格論文『価値の基礎づけの問題』のなかの『現象学的価値論批判[40]』で行なわれているが，その中心は，科学的には明証性など承認できないということである．科学の進歩はこの明証性を否定して

いくことによって可能となったのである．

第二の方向は，自然科学的な方法と文化科学的方法とに分けて論じられている．自然科学的方法が不可能なのは，そこで用いられている法則と規範との根本的な相違からして明らかである．そこで人間の文化現象たる社会の歴史を振りかえると，歴史主義的な価値の相対主義がみえてこざるをえない．そしてこれは自然法の主張する絶対性とは相反するものなのである．

このように客観的な価値を否定する彼は，具体的な価値評価，規範の承認ならびにそれに対応する行為の中に，価値や当為が存在するのだとする．

トーピッチは『自然法の問題』で，自然法的な価値の基礎づけは理論的には不可能であるということ，また自然法的な要求は，社会の動揺期の現われであるとしていた．これに対し，52年の『歴史主義とその克服』では，自然法の発生を説明する概念としてハインリッヒ・ゴンペルツから借用した「擬人的アナロジー」が登場する．この概念によって，彼は自然法の発生を説明するのだが，同時にアナロジーの使用の限界についても言及されており，後の『形而上学』の方法的基礎はこのときすでに固まったとしてもよいであろう．ただし『形而上学』の資料は，彼のアメリカ留学によって補われるし，またR．K．マートンなどの研究も取り入れ論証もさらに精密になるが．

トーピッチは未開民族や歴史的伝承にみられる世界解釈の本質として，遠くのものや未知のものを近くのものや既知のもの，また価値のある重要なもののアナロジーによって「説明」[41]することを指摘している．そのさい，生命現象，規範，目的あるいは生産と関係深い人間の意図的行為がモデルとして用いられる．このような思考モデルとして，彼は，『形而上学』では次の三つをあげている[42]．

1．擬生物的モデル

2. 擬社会的モデル

3. 擬技工的モデル

彼はこれらのモデルに，翌54年にはさらにひとつのモデルを加える[43]．

4. 脱我的・浄化的モデル

がそれである．しかし，注意しておくべきことは，トーピッチはこの4つのモデルを未開人の思考や神話的伝承から帰納的に抽出したものではない，という点である．彼はこれらの思考モデルを彼の分析批判対象との関係で選択しているのである．それゆえにこそ，これらのモデルを用い，それらのモデルを合理化していくことによって成立した形而上学的思想や自然法論を明快に分析批判することが可能となるのである．

しかしながら，このような方法には当然短所も伴う．彼は科学的説明の客観性の基礎を対象の同形性や規則性に求めているが，文化現象，特にその歴史を扱うさいに，この同形性や規則性という最終法延に訴えることはきわめて困難なのである．それゆえにトーピッチの説明が科学的な説明よりはむしろ解釈に近くなるのは当然であろうし，その結果主観的な，時には強引な説明となるのはやむをえないであろう．特にこのような事情は，彼が分析に用いるモデルの数の少なさによっても促進されていると思われる．

何はともあれ，彼は，後に形而上学や自然法において，絶対的・客観的な価値の基礎づけに用いられるようになる神話的な思考モデルを，人間の社会関係や生産行為から説明する．このような思考モデルによって世界や人間の身心が解釈されるようになると，人間社会の諸要素がそこに読み込まれるようになる．宇宙は家族や氏族，ポリスや国家であるとされたり，巨人や神による被造物，また巨大な生物などと解釈される．そのさい人間社会の規範がそこに読み込まれることにより，自然の法，つまり自然法が成立する．このようなアナロジーによって世界を解釈することそれ自体は，自然現象のなかの同形性や規則性に関する認識をいささかも増大させ

るものではないが，そのことによって人々が世界のなかの不変なものを探究することを促したという意味で，きわめて実り多いものであった[44]．アナロジーの使用自体はなんら批判すべきことではない．

問題はこのようなモデルを使用することによって，どのような帰結が歴史上生じるに至ったかということである．たとえばこのような思考モデルによって世界が解釈されると，それは秩序あるコスモスとして，諸物の法的共同体として把握されるようになる．万有がひとりの王によって支配される王国として解釈されたり，また破るべからざる法秩序によって支配されるポリスとして解釈されるようになる．つまり世界は法や道徳の秩序に従うものとして美化されるのである．しかし，このような法則が自立し実体化されるようになると，今度はその原型である人間社会の秩序の上位に位置づけられた自然法によって，人間社会の規範が評価される．自然のなかの恒常性——たとえば星の動きなど——によって客観化絶対化された法則によって，人間社会の法や制度の正邪が判定されるようになる．しかしながら，価値や規範は自然界には存在しないので，自然法によって人間社会の秩序を正当化したり否定することはできない．もしそれをしようとすれば，あらかじめ暗黙のうちに価値や規範を自然に読み込んでおいて，あらためて自然からその価値や規範を引き出すという循環論法に陥いらざるをえない．もしくはストア学派のように次から次へ新たな概念をもってくるという内容のない定式をもてあそぶかである[45]．

またトーピッチはアリストテレスとの連関で，理性についても，そこから何らかの規範を循環なしに引き出すことはできないと指摘している[46]．

ここで理性に訴えかける自然法的な論証の現代における一例をみてみよう．

《……科学や科学の客観性はともに思想の自由な競争に，すなわち自由に基づいているからである．もしも理性の成長がつづけられるべきだとすれば，また人間の合理性が生き残るべきだとすれば，個々の人間の

多岐性，つまり彼らの意見や企図，目的などの多岐性はけっして干渉されてはならないのだ．……人間の進化に関するかぎり，その源泉は，「一風変っていて，隣人とは異なってあることの自由」，つまり「多数派と意見を異にしてわが道をゆく」自由にある．人間の権利の平等化ではなくて，人間の精神の平均化を導かざるをえない全体論的統御は，進歩の終焉を意味するであろう．[48]》

これは，ポパーの『歴史主義の貧困』からの引用である．ここであらかじめ断っておきたいのは，ポパーの他の著作——たとえば『自由社会の哲学とその論敵』——を批判しようとしているのでもなければ，本書『歴史主義の貧困』を批判しようとしているのでもない，という点である．上の引用は，理性から一定の価値や規範を引き出すことはできない，ということを示すために用いられているので，前後関係を一切考慮していない．

上記の引用を整理すると次のようになるだろう．

1. 理性または合理性の発展を望む者は，科学の進歩を肯定しなければならない．
2. 科学の進歩は自由な競争に基づく．
3. それゆえ理性や合理性を支持する者は，自由な社会を是としなければならない．

この論法には，その各々に疑問となる点がある．1 では，理性や合理性の問題を科学に近づけすぎている．また 3 においては，科学者集団の問題を社会一般にまで拡大させている．しかし何といっても問題は 2 にある．ここがこの論証の核心であり，理性から自由な社会の肯定が導き出される中核である．それゆえまた，トーピッチがアリストテレスに対しておこなった批判，すなわち自然法一般に対しておこなった循環性の指摘をくつがえすかのような外観を与えるものなのである．

この2の命題はポパー自身の科学の進歩に関する考え方であるが，われわれはそこまでポパーと共に歩む必要はない．科学の進歩の原因を，彼

は，本来科学と科学外的な命題との境界理論として彼が提出した反証可能性の基準を実際の過程に適用し，自由な競争にあるとしているのである．しかし科学ははたして自由な競争によって進歩するのであろうか．ここにTh. クーンのパラダイム論をもってくれば，結果は大いに異なってこよう．彼の理論によれば，パラダイムを共有する研究者集団内——この意味で閉鎖的な——における通常科学的な研究こそが多数の科学者が従事していることなのであり，これにより多くの成果があがっている．そしてこのような通常科学の危機からパラダイム革命が生ずるということである．そうすると3の自由な社会の擁護というポパーの結論は修正を余儀なくされるだろう．

日本ではトーピッチの立場として，実証主義または批判的合理主義をあげるのが通例である．60年代のドイツで行なわれたいわゆる実証主義論争のなかで，批判的合理主義の側からは，自分達の立場が実証主義とは異なるのだという主張がなされている．しかし，本稿は Topitsch の初期の思想にその対象を限定しており，『形而上学』をのぞけば，それは54年以前の彼の論文に限られている．そして，『形而上学』の構想や方法論的基礎づけは，すでにこの時期にできていた[47]．さらに私の知る限りでは，K. ポパーに関する言及は，54年の『社会，技術および哲学的論証』が最初であり，それゆえ，本稿が対象としている彼の立場は実証主義であったとしてもよいであろう．

自然法の批判それ自体はトーピッチのオリジナルではない．彼の研究の最も大きな特徴は，自然法も含めた形而上学的思想の歴史を知識社会学的——このように表現すると，彼の業績をせまく限定してしまうかもしれないが——観点から記述し，分析批判したということである．そしてこのような知識社会学的研究の意義をトーピッチは，認識の改良，イドラ批判，すなわち啓蒙にあると考えていた．

結びにかえて

本稿はトーピッチの初期の思想の紹介を目的とするものであった．しかしまた，先に示唆したように，彼が70年代に入ってからみずからを保守主義者であるとするようになった内在的原因を探究しようとする意図も併せ持っていた．最後にこの問題に簡単にふれておきたい．というよりも本稿の構成は，この問題に対する私なりの仮説を提出するために，かなり意図的にトーピッチの前期の思想から取捨選択をした結果となっている．また，彼みずから保守主義を称するのは70年に入ってからであり，本稿が取り扱った初期の思想とはかなりの時間的な隔たりがあるのであり，以下はあくまでも仮説もしくは推測の域を出ないものであることをあらかじめ断っておきたい．

トーピッチの立場は独裁制よりは民主制を，社会主義経済よりも資本主義経済を支持しているように思われる．要するに一貫して反マルクス主義的な態度を維持している．マルクス主義は神話的・形而上学的思想の1つとして，彼のイデオロギー批判の少なからざる部分を占めている．ただこの批判の比重は，60年代後半から著しく上昇する．60年代の前半までは，数多い自然法思想の1つとして批判されていたにすぎないマルクス主義は，60年代の後半の学生運動を境として，彼の批判の主要な対象となっていく．その批判のタイトルだけでも『左翼の支配イデオロギー』，『神化と革命』，『「学生革命」の反動的イデオロギー』，『支配イデオロギーとしてのマルクス主義』等にみられるように，きわめて攻撃的である．そして批判の内容にいたっては，ほとんど暴露的とでも言うべきものさえ含まれている．それに彼は科学的な装いを与えようとしてはいるが，その意図するところはあまりにも明白である．彼を保守主義のイデオローグであると感ずるのはマルクス主義者だけではあるまい．

トーピッチのイデオロギー批判は，形而上学的な価値の基礎づけを一切

否定するものであった．そしてこのことは，民主制や資本主義といった現体制の正当化の可能性をも同時に拒否することにならざるをえない．トーピッチは彼のイデオロギー批判が諸刃の剣であることを十分承知している[49]．価値とはあくまでも主観的なものでしかない，という考え方が彼の批判の根底にある．それゆえ彼は，他者の価値判断に対して最終的には何も言えないとしていた[50]．つまり彼は，現体制を否定し新たな社会の構築をめざす急進的な学生運動に対して，相手の価値や理想の客観性はどのようにしても科学的には基礎づけることができないものなのだ，ということは主張できるが，その価値判断自体を否定することはできないのである．そしてこのことは同時に彼の立場に対しても妥当するものである．自己の価値判断を正当化することはできない．しかしまた，彼のイデオロギー批判の目的は平和な社会秩序の実現にある．そしてこの目的よりも，たとえば正義や平等などを高く評価し行動する人々が存在する場合や，再びファシズムの実現をめざし活動している人々が勢力を増している場合さえ，彼の立場からは理論的には何ら批判をすることはできない．もちろんそれらの人々が何らかの客観的価値を主張する場合は批判可能であるが．このような彼の立場の弱点，すなわち自己の支持する価値をも正当化することができないということが，トーピッチのマルクス主義批判をかなり感情的なものにした一要因だったのではなかろうか．

ただしひとつ留意しておきたいことがある．それはトーピッチがそれと知りつつかなり無理があるマルクス主義批判（非難）をしているのではないか，と思われる点である．彼にとっては，世界には意味も価値も存在しないということは自明であった[51]．それらは人間が創り出すべきものなのである．またトーピッチは「強い倫理的情熱にささえられていたので，ヴェーバーは自分が主張する上位の価値を『科学的』に証明する必要は――最終的にはほんの暗示的なものさえ――全くなかった[52]」と述べている．この立場はトーピッチのそれでもあろう．また『歴史主義』では，社会の危機

的な状況について次のように述べている.

《このような状況では次のようなことが明らかになる. すなわち, 社会的・文化的な構造の運命は, 何らかの知的論拠とは全く別の要因によって規定されている. つまり敵対する立場や価値の「権限」や「相対性」もしくは「絶対性」に関する理論的な討議は, 実際の決断の重みの前にはよすべて無効になってしまうのである.[53]》

ここには明らかに理論よりも実践を重視する態度がみられる. トーピッチの支持する価値, つまり民主制や平和, 自由主義的経済秩序を破壊しようとする学生運動に社会の危機をみた彼は, 科学的理論よりも政治的実践を選んだのではなかろうか. その結果, 彼はおよそ科学的とはいえない彼の最近のマルクス主義批判に, その実効性という観点から, 科学的な装いを与えることも辞さなかったのではあるまいか. もとよりこれは私の推測の域を出るものではない. しかしこのような推測も, 彼の理論を体系的に理解するための一助としてそれを用いるのであれば, 十分認められてしかるべきものであろう.

註

1) E. Topitsch, Vom Ursprung und Ende der Metaphysik. Eine Studie zur Weltanschauungskritik, 1958. 以下『形而上学』と略記.
2) E. Topitsch, Sozialphilosophie zwischen Ideologie und Wissenchaft, 3. Aufl., 1971, S. 28. 以下の引用はすべてこの第3版による. 生松敬三訳『イデオロギーと科学の間. 社会哲学(上)』1972, 29頁. イデオロギー批判を知識社会学の一部に含ませなければならないという必然性はない. たとえばTh. ガイガーのように, イデオロギー批判を論理分析の枠内でおこなうことも可能である.
3) E. Topitsch, Das Problem der Wissenssoziologie, »Wissenschaft und Weltbild«, Jg. 6 (1953).
4) E. Topitsch, Wissenschaft unt Gesellschaft, »Wissenschaft und Weltbild«, Jg. 2 (1949).
5) E. Topitsch, Sozialphilosophie zwischen Ideologie und Wissenschaft,

S. 28. 訳 29-30 頁. ただし，科学的知識の客観性についての考え方には変遷がみられる．ヴィーン学団と批判的合理主義との間でおこなわれたこの点に関する論争史が，彼の思想にも影響を及ぼしている．

6) ヒュームについてのトーピッチの評価は一貫して高い．Vgl., E. Topitsch/G. Streminger, Hume, 1981.

7) E. Topitsch, Das Problem der Wissenssoziologie, S. 382.

8) 彼の記述は，„…… es gift keine Soziologie des Wissens“ として「社会学」全体を強調しているが，文意から，日本語では本文のようにする方が誤解が少ないように思われる．註 10 参照．

9) Ebd. S. 383.

10) 原文は，„…… es gift keine Soziologie des Wissens“ である．

11) Ebd. S. 383f.

12) Vgl. E. Topitsch, Wissenschaft und Gesellschaft, S. 123, 129 Anm. 1.

13) 明らかにヴィーン大学の先達，E．マッハの影響がある．総じてトーピッチには，ヴィーン出の研究者を高く評価する傾向があるように思われる．これは彼個人の問題であると片づけられないような思想史的背景をもっているのではないだろうか．

14) E. Topitsch, Konventionalismus und Wertproblem in den Sozialwissenschaften, »Mens en Maatschappij« Vol. 27 (1952).

15) E. Topitsch, Das Problem der Wissenssoziologie, S. 386.

16) Ebd., S. 387. トーピッチはヴェーバーをきわめて高く評価しているが，この点に関しては法則的知識の重要性を強調することによって，よりいわゆる実証主義的な立場に近づいている．W. Weber/E. Topitsch, Das Wertfreiheitsproblem seit Max Weber, »Zeitschrift für Nationalökonomie« Jg. XIII (1951), S. 165. ところが，1960 年の論文，『空虚な定式について——哲学用語および政治学用語の語用論』(Über Leerformeln. Zur Pragmatik des Sprachgebrauches in Philosophie und politischer Theorie, in: E. Topitsch, hrsg., Probleme der Wissenschaftstheorie. Festschrift für Victor Kraft, 1960) では明らかに K．ポパーの反証理論への傾斜がみられる．また，マンハイムに対する彼の評価も当然変化することになる．たとえば，E. Topitsch/K. Salamun, Ideologie, Herrschaft des Vor-Urteils, 1972, S. 44ff.

17) E. Topitsch, Das Problem der Wissenssoziologie, S. 388.

18) Vgl. E. Topitsch, Aufgeklärter und unaufgeklärter Konservatismus. Antwort an Walter Hoeres, »Criticón« 39 (1977).

19) Joachim Kahl, Positivismus als Konservatismus. Eine Philosophische Studie zu Struktur und Funktion der positivistischen Denkweise am Beispiel Ernst Topitsch, 1976, S. 22. なお本書は，筆者の知る限り，もっとも包括的なマルクス主義陣営からなされたトーピッチ批判である．なお同じくマルクス主義側からの批判としては，Richard Sorg, Ideologietheorien. Zum Verhältnis von gesellschaftlichem Bewußtsein und sozialer Realität, 1976, S. 89ff. を参照.

20) 本稿の課題の1つは，この内在的要因についての仮説を構築することにある．

21) E. Topitsch, Vom Ursprung und Ende der Metaphysik, S. 2. トーピッチの立場については，E. Topitsch, Mythos-Philosophie-Politik. Zur Naturgeschichte der Illusion, 1969, S. 7ff. で彼自身が述べている．

22) Vgl. E. Topitsch, Das mythologische Denken, in: Kurt Lenk hrsg., Ideologiekritik und Wissenssoziologie, 2. Aufl., 1964, S. 101, Gesetz und Handlung. Zur Kritik der marxistischen Geschichtsphilosophie, »Merkur« Bd. 8 (1954), S. 325, Sozialphilosophie zwischen Ideologie und Wissenschaft, S. 130f.

23) トーピッチの研究の1つの中心として，この自由意志の問題があげられる．この問題については稿を改めて論じたいと考えている．

24) トーピッチの伝記については日本でもある程度の紹介があるが，彼の60歳の記念論文集でも若干言及されている．K. Salamun, hrsg., Sozialphilosophie als Aufklärung. Festschrift für Ernst Topitsch, 1979.

25) E. Topitsch, Wissenschaft und Gesellschaft, S. 128.

26) Vgl. K. Salamun, hrsg., Sozialphilosophie als Aufklärung, S. X. また，孫引きではあるが，トーピッチはローマ・カトリックの洗礼を受けている．J. Kahl, Positivismus als Konservatismus, S. 20.

27) E. Topitsch, Das Problem des Naturrechtes, »Wiener Zeitschrift für Philosophie, Psychologie, Pädagogik« Bd. II (1950-1952). この論文は，Werner Maihofer, hrsg., Naturrecht oder Rechtspositivismus ?, 1962. に再録されている．引用は後者による．

28) Ebd. S. 176, Anm. 48.

29) E. Topitsch, Max Webers Geschichtsauffassung, »Wissenschaft und Weltbild« Jg. 3 (1950).

30) Ebd. S. 263.

31) I. Kant, Kritik der reinen Vernunft. 高峯一愚訳『純粋理性批判』1974,

328 頁.

32) E. Topitsch, Der Historismus und seine Überwindung, »Wiener Zeitschrift für Philosophie, Psychologie, Pädagogik« Bd. IV (1952/53). この一部分が先に示した K. レンクの編集によって再録された『神話的思考』である.

33) E. Topitsch, Das Problem des Naturrechtes, S. 175.

34) E. Topitsch, Der Historismus, »Studium Generale« Jg. 7 (1954), S. 438.

35) E. Topitsch, Vom Ursprung und Ende der Metaphysik, Vorwort.

36) たとえば彼の, Sozialphilosophie zwischen Ideologie und Wissenschaft, S. 77, またヘーゲル哲学との関係については, Sozialphilosophie Hegels als Heilslehre und Herrschaftsideologie, 1967, や彼が Hubert Kiesewetter の Von Hegel zu Hitler. Eine Analyse der Hegelschen Machtstaatsideologie und der politischen Wirkungsgeschichte des Rechtshegelianismus, 1974, によせた序など頻繁に言及されている.

37) E. Topitsch, Gottwerdung und Revolution. Beiträge zur Weltanschauungsanalyse und Ideologiekritik, 1973, S. 230.

38) 註 24), 26) 参照.

39) E. Topitsch, Das Problem des Naturrechtes, S. 159.

40) Das Problem der Wertbegründung, 1951. この一部分が Kritik der phänomenologischen Wertlehre として, 彼と Hans Albert が編集した Werturteilsstreit, 1971. に載せられている.

41) E. Topitsch, Society, Technology and Philosophical Reasoning, »Philosophy of Science« Vol. 21 (1954), p. 275.

42) E. Topitsch, Vom Ursprung und Ende der Metaphysik, S. 9ff.

43) E. Topitsch, Die platonisch-aristotelischen Seelenlehren in weltanschauungskritischer Beleuchtung, »Sitzungsberichte der Österr. Akademie der Wissenschaften, Phil.-hist. Klasse 233.« Bd., 4 Abh, (1959) と Seelenglaube und Selbstinterpretation, »Archiv für Philosophie« Bd. 9 (1959) においてこのモデルは付け加えられる. 前者については筆者は未見である.

44) E. Topitsch, Das mythologische Denken, S. 96.

45) E. Topitsch, Sozialphilosophie zwischen Ideologie und Wissenschaft, S. 98ff.

46) E. Topitsch, Vom Ursprudng und Ende der Metaphysik, S. 146f.

47) K. Popper, The Poverty of Historicism, 久野 収・市井三郎訳『歴史主義の貧困』1961, 238-239頁.
48) 彼のイデオロギー批判のひとつの特徴である「内容のない定式」については，すでに52年の論文で言及されている. Das mythologische Denken, S. 97
49) E. Topitsch, Aufgeklärter und unaufgekläter Konservatismus, S. 9.
50) W. Weber/E. Topitsch, Das Weltfreihitsproblem seit Max Weber, S. 166f.
51) E. Topitsch, Max Webers Geschichtsauffassung, S. 266.
52) Ebd. S. 268.
53) E. Topitsch, Der Historismus, S. 438.